

論文の内容の要旨

氏名：堀 智 志

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：向精神薬の過量服薬患者に対する臨床学的な特徴と危険因子

【目的】近年、向精神薬を過量服薬し、救急搬送される患者は増加傾向にある。また、向精神薬の過量服薬患者の約 9 割が複数の薬物服薬によることが報告されており、約 3 割の患者は、精神科を標榜する高次医療機関に搬送されている。これまで、多種類の向精神薬を同時に服薬した場合の薬物相互作用や相乗効果による臨床的特徴や合併症について検討した報告は少なく、どのような救急処置が必要か、治療上の問題点や合併症の発生について不明な点が多い。本研究では、救急医療の現場で多種類の向精神薬を服薬した患者の臨床的特徴を検索し、治療に関わる呼吸・循環管理上の注意点と合併症の発生と服薬薬物との関係を明らかにすることを目的とした。

【対象及び方法】2010 年 1 月 1 日～2011 年 12 月 31 日に日本大学医学部附属板橋病院救命救急センターに搬送された向精神薬の過量服薬患者で、①抗不安薬（ベンゾジアゼピンとバルビツレート）、②向精神薬、③抗うつ薬（SSRI や SNRI、三環形抗うつ薬）、④気分安定薬のいずれか 1 種類以上を含む薬物過量服薬患者とした。救急集中初期診療に関わる因子は、年齢、性別、来院時のバイタルサイン、動脈血血液ガス分析、服薬物の種類、服薬乗数、意識障害の有無および器官挿管の有無とした。合併症は誤嚥性肺炎の発生、頻脈の発生、徐脈の発生、低血圧の発生について検索した。

【結果】期間中の薬物過量服薬期間中の薬物過量服薬症例は、302 例であった。気管挿管症例に最も関与した因子は高 PaCO₂血症で、服薬薬物ではバルビツレートであった。合併症の発生は、誤嚥性肺炎が 48 例（15.9%）、頻脈の発生は 77 例（25.5%）、徐脈が 25 例（8.3%）、低血圧が 16 例（5.3%）、意識障害が 86 例（28.5%）であった。意識障害が起こった症例では、誤嚥性肺炎の合併が多く、気管挿管の施行率が高かった。合併症と薬物の関係は、抗精神病薬は、誤嚥性肺炎の発生と頻脈の発生に関連があった。バルビツレートは、誤嚥性肺炎の発生と頻脈の発生、意識障害の発生に関連していた。

【結論】多種類の向精神薬を過量服薬し、意識障害を合併している例では合併していない例に比し、気管挿管の施行率が高く、かつ誤嚥性肺炎の合併率が高かった。特に、服薬薬物にバルビツレートが含まれる場合に多かった。以上より、バルビツレートの過量服薬は、誤嚥性肺炎や気管挿管の必要性が高まることの危険因子であるため、呼吸状態を経時的に把握し、その管理が最も必要であると結論した。